

# 幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟  
会報 No.33  
平成19年3月26日

## 横浜能楽連盟創立六十周年にむけて



会長 新堀 豊彦

ついこの間、連盟創立五十周年のお祝いの行事を開催させて頂いたと思ったところ、あれからもう八年、来るべき平成二十年（二〇〇九年）には、なんと六十周年が巡って来ることにあります。

「お能と横浜」（かなしん出版）は、その時の記念誌であり、横浜における能楽界、各流派の発展の歴史と、ことに横浜能楽堂建設にかかわる記録の総集版としてまとめさせて頂いたものであります。

そして又同時に、五流大会も二日間にわたって行い、素人能四番を中心に盛大な五十周年記念行事として祝わせて頂いたの

であります。

その甲斐あってか、その年の十一月三日、文化の日に連盟は神奈川文化賞の栄に輝きました。既に昭和四十三年、横浜文化賞も受賞しておりましたが、この半世紀に及ぶ古典芸能普及発展の活動が、公に認められ結実したという実感がひしひしとおし寄せ、当時を思いおこしますと感無量であります。

その後、さらに我々は、主催者として継続して参りました「横浜能」も平成十四年、第五十回の演能を三日間にわたって行い、横浜能楽界に大きな足跡を残すことが出来たものと確信いたしております。

そこで、二年後に迫った六十

周年の節目をどうするかが、連盟としての大きな課題となりました。

目下、理事会を中心に、ひとつの新しい企画を立案しており、それがかたまりつつありますが、これは更に広く会員の皆様にもお呼びかけして、よい考えやアイデアがあれば出して頂き、五流大会を中心に盛り上げたいと存じます。

六十年の重みと次のステップを、新しい時代にふさわしい希望が持てるような舞台を実現出来れば素晴らしいと考えます。

歴史と伝統は能楽の世界における誇るべき宝であります、その上に二十一世紀を期待させる何ものかを、我々は加えられれば望外の喜びでありましょう。

## 連盟報告

企画事業担当 鈴木 力雄

平成十八年四月二十四日に行われた定期総会において、承認いただいた活動計画に則り、横浜能楽堂との共催による第五十四回横浜能は、観世流梅若会・梅若靖記師により「女体 替装束」と言う珍しい小書付の『殺生石』が演能された。師は、横浜での能楽普及に大きな功績を残された、故梅若恭行師の御息であられるが、横浜での演能

は初めてで、且つ急遽決まったこともあり、チケットの売れ行きが心配されたがチケットは完売。見所は満席の盛況であった。「第二十二回五流能楽大会」は平成十八年九月に、「第十回五流交流のつどい」は平成十九年二月に別稿のとおりそれぞれ実施した。

## 第十回五流交流のつどいを終えて

当番幹事 観世流 鈴木 力雄

平成十九年二月十日（土）恒例の「五流交流のつどい」が横浜能楽堂本舞台で開催され、無事終了しました。

くの方々に参加頂き盛況のうちに終わることができたことを感謝しております。

運営については、金剛流（前回の五流大会の幹事）の提案を受けて、控室の使用区分を流派毎でなく男女別とし、ワンフロアーとし、空いている部屋を適宜使用する。又、第二舞台は出演前の申し合わせの場として使うこととした。

結果として、各流派の交流が図られると共に幹事の連絡、呼び出しの面でスムーズに行われた等、満点の成果が得られた。

開演九時四十五分、終演十七時十八分、予定どおり終了できました。

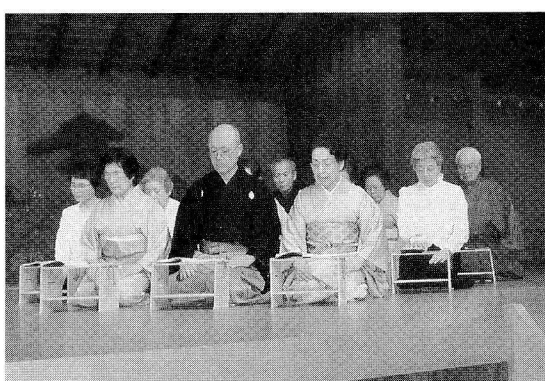
各流派の申込時間に対する正味時間は大きな差異がなく、皆様のご協力ご尽力に感謝申し上げます。

## 能「葛城」を観て

観世流 梅若会 森田 英男

過日、梅若の舞台で定式能を観て来ました。白一色の峨々たる深山に広がる神話の世界に浸って楽しんで参りました。

先ず舞台中央に雪を頂いた作り物が出され、ワキの登場です。着ゼリフあり又雪が降って来たので木陰に立ち寄った所に、奥より美しい声にて呼掛があり、



シテが登場して「私の家にて一夜を明かしなさい」と誘われ宿に着きます。山伏が後夜の勤めを始めると、シテが我に悩める心ありと、祈加持して下さいと頼む。それは石橋を掛けなかつた咎めにより、葛葛に縛られ苦しみを受けている、いたましい姿である。

やがて山伏の祈禱により自由になったシテ女神はお札に大和舞を舞って見せ、夜の明けぬうちに岩戸のうちに去っていきま

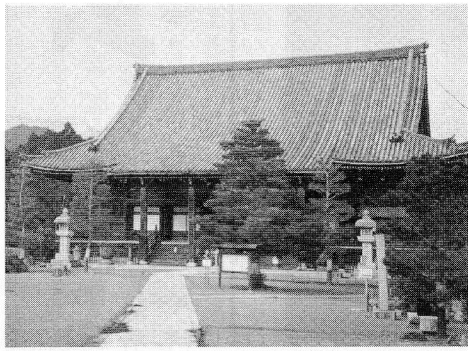
す。雪に埋もれた葛城山のしんとした静けさのなかに繰り広げられる物語の美しさに心を奪われ忙しい毎日を忘れていつときを楽しんで参りました。

## 縁

金剛流 倉藤 睦子

生後二ヶ月より結婚するまでを京都の奥嵯峨で過ごしました。家のすぐ裏には祇王寺があり、外出する時に必ず通り抜ける清涼寺では三月に奉納される鉦に合わせての無言狂言を見て過ごし、墓参は野々宮の隣。

夏泳ぐ所は小督の局の塚の前。十三才の頃から法輪寺にお参りをし、バレエのお稽古は車折神社近くの教室。そして中学・高校は鹿ヶ谷に通う事になりました。



京の清涼寺

した。

先生方の中にお能の囃子方のお家の方が何人かおられ、能楽クラブがありました。高二の終わり頃、ここで広田隆一師から謡の手ほどきを受ける事になりました。又、この中学では私の進路に大きな影響を与えた英語教師との出会いがありました。

時には、着物で授業をされる先生は表情が豊かで生徒達を引きつけるとても魅力のある方でした。大学に進み、能楽部に入り、豊嶋三千春師に師事する事になりましたが、何と先の英語の先生は三千春師のお姉様という事で驚きました。学生時代は夏の合宿や能楽期の舞台などで忙しく過ごしました。能を勤めさせていただいた時には故豊嶋弥左衛門師の御指導もいただき幸いでした。卒業後二十数年のブランクの後、今、豊嶋訓三師

に師事しております。

考えてみますと育った環境、多くの師との出会いなどとても不思議な縁を感じます。この連盟の活動などを通じて他流会、自流のいろいろな出会いが、私の支えになっており感謝しております。

## 喜多流出雲会について

喜多流 岡林 孝

喜多流出雲会は、喜多流職分出雲康雅先生の下で、横浜市内で稽古している人達の親睦の会で、平成十五年発足しました。

会員は横浜能楽堂、久良岐能舞台などで稽古している十グループと、個別指導の方々併せて七十余人です。

出雲先生は広島のご出身で、広島、東京につき平成二年横浜でお稽古場を開かれ、翌三年から十四年まで、久良岐能舞台で「謡曲と仕舞教室」の講師として、また平成八年に開館した横浜能楽堂では「みんなで謡う高砂」を始め、数々の講座の講師を勤めるなど、初心者の方々の指導育成に力を注がれました。

当会は久良岐能舞台と、横浜能楽堂の「教室」で、初めて謡曲や仕舞を習った人達が多く、教室修了後も多くの人達が稽古を続け、いまでは会の中心にな

っています。また最近能楽堂では、出雲先生の夜間教室も開かれ、お勤めを終えたOLや会社員の方々が、謡曲や仕舞の稽古に励んでいます。

平成八年久良岐能舞台で、お弟子さん達が合同でお浚い会を開いたのが、当会の始まりで、平成十三年からは「出雲会」の名称で、年二回横浜能楽堂で、日頃の稽古の成果を披露しています。その後お弟子さん達の親睦団体として、平成十五年に「喜多流出雲会」が結成され、現在に至っています。能楽連盟を始め、各団体の能楽の会には、以前から有志が参加していましたが、現在は横浜喜多会の一員として、能楽連盟主催の五流の集いには、毎年参加させて頂いています。五流の会では、同流の先輩方や、各流の同好の方々とともに、能楽堂の舞台を踏むよい機会でありまして、また大きな励みにもなっております。

ところで各流各会では、それぞれに歴史ある伝統の行事がありと思いますが、当会では、広島宮島厳島神社の神事「桃花祭」への参加があります。厳島神社の西の回廊から、海へ迫り出た能舞台（重要文化財）で、毎年四月喜多流など、シテ方による能と、狂言方による狂言の上演が、三日間に亘って行なわ

れる神事で、出雲先生は厳島神社代々執事を勤めておられます。行事には、先生のお声がかかり、会員（男性）の中からシテや地謡への出演が認められています。地謡は長袴を付け、長時間の正座で足の痺れと闘い、面を付けたシテは方向を見失ったり、舞台から足を踏み外しはしないかと、危険を感じながら舞い続けます。

舞台に向かって作られた仮設の見所には、厳島神社の参拝客も加わって、大勢の見物客が訪れ、のどかに海上の能を楽しむ風景が見られます。一方楽屋では、出演者の仕度や出入りで、先生方は大忙しですが、今は亡き人間国宝粟谷菊生先生（平成十八年十月ご逝去）も、しばしば楽屋においてになられ、出演者を励ましたり、装束の着付に手を貸したりされていました。その時の先生の悠々たるお姿が今も忘れられない思い出です。

## 沢庵と謡曲「熱海」

金春流 中田 剛充

沢庵は江戸時代、徳川家光の厚遇を受け、柳生宗矩に大きな影響を与えた禅僧です。その沢庵が作ったのが謡曲「熱海」です。熱海は静岡県の温泉地です。沢庵は、なぜ今で言うご当地

ソングならぬ、この謡曲を作ったのでしょうか。

初めに、「熱海」のあらましを紹介します。

名乗は「ワキ詞 是は東国行脚の僧にて候、我此程は三島の明神に参籠申し、又是より伊豆権現を拝み申さんため、只今御山へと心ざして候」(校註謡曲叢書、以下引用同)に始まり、道行、着セリフのあと、前シテ樵の翁が登場します。

「是は當国熱海と申す所なり」と出湯の説明と効用を謡い、驪山宮の故事を引き、有馬、蘆刈、犬飼、名取、七久里、但馬の各地の出湯をあげています。

さらに源実朝の「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に」の歌を引いて付近の海や島(現在の初島)を紹介、新千載和歌集の大僧正覚円などの歌を引用しつつ網代の港、敵討ちの曾我兄弟の故事から伊東、河津、赤沢山と伊豆の地名を読み込んで前シテは中入りします。

中入り後、後シテの医王善逝(薬師如来)が現れ、夜昼四度の盥の出湯は「萬の悩みに注ぎそそげば、病即消滅不老不死、業障も盡き忽ちに、衆罪も消えて煩惱の雲晴れ、真如の月も、心の空に曇りなく、夜晝分かぬ光を放ち、夜晝わかぬ光を放つ、

恵日の影ぞ有難き」で終わります。

引用が長くなりましたが、温泉の効用と仏の功德を謡った内容といえます。

沢庵の「熱海」は、寛永十七年(一六四〇)六十八歳の作で、

細川忠利への手紙に記されています。内容は、熱海へ湯治に来る、手や腰の痛みを癒し針灸で養生、だいぶ良くなったが、本を読んだり、書き物をしたりしており、これは持病といえるものなど

記した後、

「熱海と申諸一番作り申候、節、章句皆々出来申候」

(沢庵和尚全集)とあります。

沢庵はいわゆる紫衣事件で徳川幕府の威光



最近の熱海(市提供)

に抗し、出羽上山(山形県上山市)に流罪となり、大赦で江戸に戻ったのは寛永九年(一六三二)六十歳でした。その後、宗矩との結びつきから家光に謁見、厚遇をうけることになります。

沢庵は七十三歳でなくなりませんが、養生法や薬の効用を説いた書もあり、湯治は心身を癒す、と考えていたのでしょう。また手紙には故郷の但馬国出石(兵庫県豊岡市)の湯のことが再三出てきます。熱海で思いを但馬の湯と重ね合わせていたとも考えられます。

熱海の出湯は、徳川家康が二度訪れたことで名を高め、江戸時代、大名が相次ぎ訪れ、後に御汲湯献上にまでなりました。家光来湯の記録はありませんが、江戸で評判だったことは確かです。

あった神社です。

沢庵は上山の塾居中に和歌一千首を詠んだといわれ、詩歌、書画、茶道、音曲まで通じた多彩な趣味教養人でした。江戸大名が能に肩入れした時代であり、沢庵も能への造詣は深かったでしょう。

家光から江戸城の能に招待されたり、熱海湯治の前年、忠利へ「先日の松風はすばらしかった」とお礼を書くぐらいです。一箇所四十日もいて、歌心が湧き、謡曲一番作ってみようか、と思ったのではないのでしょうか。もっと深い意味があったのかも知れませんが、勉強不足です。

残念ながら、この「熱海」はまだ本のままです。能舞台のある熱海のMOA美術館でも演能を検討したということですが、実現にはいたっていません。

かくいう私は熱海が故郷です。機会をいただいた場をお借りして、この一文をしたためたしだけです。先輩諸氏のご批判をいただければ幸いです。

## 久良岐謡曲教室の復活を望む

副会長 高岡 幸彦

私は田辺竹生師の推薦により平成八年十月より久良岐謡曲教室に於て、同教室が文化振興財

団の収支の都合により平成十四年三月閉鎖になる迄約六年間観世流初級教室の指導をした。

中級は伊藤文司師がこの教室が出来た当初より平成十三年体調不良で引退される迄指導をしておられた。その間私は伊藤師に大変色々な事を教えて頂いた。伝習期間は初級も中級も二年間で伊藤師の初心者指導の実績及び功績は私共とは比べる事も出来ない偉大なものであった。私の六年間でも初心者毎年十名以上が卒業し、大半は伊藤師の中級に進んだが、一部素人同志の会に入って謡曲を楽しむ人もいた。

今でも観世の能の会とか、能楽連盟の「五流交流の会」とかは且ての卒業生が数多く見受けられる。その人達がいつも言われる事は、「私達は久良岐の初級コースで指導して貰えたので、謡曲の事もお能の事も何も知らなかったが、現在謡曲や仕舞を楽しみ、お能を見る事も楽しみ、人生で大いにプラスになっている。」「お能は最初とてもとつつきにくいものなので是非、又あのような初級教室でお謡や観能の楽しみを教えてあげて下さい。」と言う。これは多数の人から聞いたのでその人達の実感だと思う。

又、これには費用の問題もある

る。初めて謡曲を習おうと思う人は高尚な趣味で習うには大変費用がかかると思っている人が多い。初級教室の月謝は三千円程度で抑えなくては一般の人はなかなか参加出来ない。従って半分はその場所の費用、募集の費用、事務費として約一千五百円程度の月謝で教える気持ちがないと成り立たない。これはプロの能楽師にはとても無理な注文である。

趣味で謡曲仕舞をやっており経済的にも余裕のある観世で言えば名誉師範の資格を持つ人達にこれを引き受けて貰うのが最適だと考える。

先日、東京観世会の定期能を見に行った時、空席の多いのに驚かされた。この傾向は観世では最高の観世会の定期能にもほぼつづつ現れてきたと聞かされた。且て久良岐の館長が横浜能楽堂の課長であった時に、中田課長にこの問題を提起したところ能楽堂に観能にくる人は謡を習っている人より一般の人の方が多いのでその心配は全然ありませんと言われたが、果たしてこのままでいいのであろうかと危まれる。

一方過日ある会で山崎館長とお会いした時、このお話をしたところ一般の傾向として謡曲を習う人が少なくなった事は事実であり大変心配な事だと話された。

今回久良岐能舞台の管理体制も変わったので、この様な事を新しく管理される方とお話をし、道筋をつけておきたいと考えている。

私も八十五才の老齢で何時迄も続ける事は不可能である。せめてこれが出来たところで伝導出来るのは二・三年であるが、道筋だけつけて心ある後進に後をお願したいと思っている。

## 謡曲と私の登山

宝生流 市川 克弘

謡曲のなかには、日本の山々の名称、景色が数多く盛り込まれていて「善知鳥」や「山姥」は北アルプスの雰囲気を感じさせてくれる。

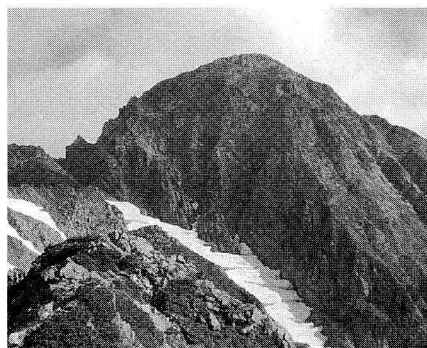
「山姥」の「殊に我が住む山家の気色。山高うして海近く谷深うして水遠し。」この文から切り立つ岩壁、深山幽谷の雰囲気が味わえて、ああいいな。またアルプスに出かけたいな。と思わせてくれる。

私の謡曲歴は、未だ三十年で短い登山歴は四十五年で謡曲より少し長い、最近はお握りと飲物を持って日帰りコースを気軽に歩いている為か、青春時代のアルプス登山よりも辛さ、疲労感は少ないように思える。

最近、毎年一月から五月頃

まで月に一度の割合で丹沢や奥多摩の山に出かけて脚力・心肺機能等を強化しつつ、雪解けと共に高い山に登り、そして夏には三〇〇〇m級のアルプスを目指している。

そして秋になると徐々に低山を歩いて十二月には丹沢・奥多摩あるいは箱根の山等で納めとしている。



残雪の「剣岳」

一昨年は一月から五月まで丹沢の山で脚を鍛え、五月末には鍋割山で満開のミツバツツジ、レンゲツツジ、ゴヨウツツジを楽しむことができた。そして六月には奥秩父の甲武信岳（二四七五m）で十六km歩いて花を楽しむ、七月に南アルプス鳳凰三山の薬師岳（二七八〇m）、観音岳（二八四〇m）、地藏岳（二七六四m）に登り二十四km歩いた。そして七月三十日から八月二日にかけて、富山から美女平、室堂、浄土山（二八三二m）、雄

山（三〇〇三m）、大汝山（三〇一五m）、一服剣、前剣、カニのタテバイ（二九八八m）、カニのヨコバイ、剣沢小屋、室堂、大観峰と十七kmであるが難所の連続する日本屈指の鎖場を楽しむ事ができた。

そして二ヶ月後に丹沢の大山（一二五二m）に登った翌日から脚の筋肉が痛くなつて、駅の階段の昇り降りを楽しむ事になった。やはり月に一度は低い山でも登って鍛えなければ駄目な事が判った。

神奈川宝生流の教授嘱託会・横浜連合会の月例会、その他種々の月例会や大会の合間を縫って登山に出かけるのは日程的に忙しくもあり楽しくもある。

大会の前日、もしくは前々日には山から無事に帰宅しなければならず、且つ仕舞の地の役が当たっている時には安心して謡えるようコピーを持ち歩いている。登山では低山からアルプスまで、謡曲では入門から奥伝まで楽しみつづ、常に登れる、謡えるように努力する事が肝要と思うこの頃である。

▽二年後の平成二十年には、創立六十周年が巡って来ます。これまで歩んで来た歳月を踏まえてますます発展して行きましょう。

## 能楽堂より

十九年五月の公演

横浜能楽堂では、次のとおり公演を開催いたします。

企画公演 もう一つの「翁」

五月十二日（土）午後二時開演

古態「翁」

観世鏡之丞 田崎隆三

山本東次郎 山本則重 ほか

奈良の春日若宮おん祭りなどで明治維新まで演じられていた

古態の年預による「翁」を、早稲田大学演劇博物館二十一世紀

COE演劇研究センターとの共同研究の成果として、復元上演

いたします。

S席五千元、A席四千元、

B席三千元。チケット発売中。

お問い合わせ・お申し込みは、

☎〇四五（二六三）三〇五五まで。

《編集後記》

▽二年後の平成二十年には、創立六十周年が巡って来ます。

これまで歩んで来た歳月を踏まえてますます発展して行き

ましょう。

▽二月十日（土）に行われた「五

流交流のつどい」で、忘れも

の、紳士もの靴の履き違え一

足。能楽堂で保管しています。

お心当りの方はご連絡くださ

い。

## 横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合

〒233-0013 横浜港南区丸山台丁目

FAX 〇四五（一八四）二九〇三

◎電話の場合 横浜能楽堂

TEL 〇四五（二六三）三〇五〇